

北調査区包含層出土瑞花鳳凰八稜鏡について

西川 寿勝

北調査区の包含層から瑞花双鳥八稜鏡が発見された。残念ながら古墳時代から中世頃までの土器とともに出土しており、鏡の時期やどのような目的でこの地にもたらされたのか特定できない。しかし、この鏡式は唐風の紋様構成と日本風の紋様構成が混在する過渡的鏡式で、日本独自に発展していく「和鏡」成立過程を示す注目すべき資料として知られる。

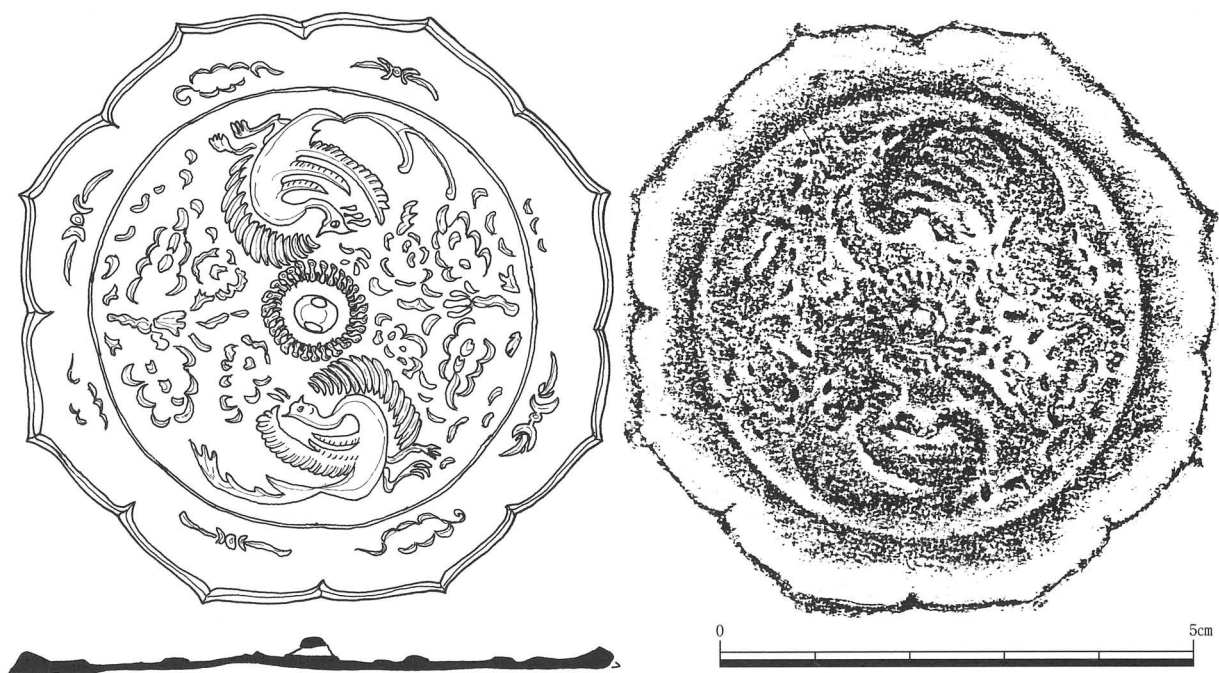
この鏡は最大径8.8cm、外縁がわずかにせりあがり、断面形が三角となる八稜鏡である。現状は66gである。中心は緩やかに振る緻密な花心紋の鈕と鈕座がある。鈕の高さは約0.3cm、いびつで華奢な半円形で、中国鏡とは峻別できる。また、後の時代に踏み返された高麗鏡などの鈕形態とも違い、わが国で作られた鏡であることがうかがえる。

内区主紋様は鈕を中心に二羽の鳳凰が相對して刻まれ、その左右には瑞花と呼ばれる唐草化した花紋がある。相對する瑞花と鳳凰はほぼ同じ構図である。鳳凰は尾羽を長く描き、冠羽もみられる古式の形状だが、体軀は厚く鴛鴦に近い。瑞花は左右に草葉を開き、中心に蕾状の瑞花を伴う。

内区の外側はわずかに高くなり、外区となる。両区を区切る圈線や段は明瞭でない。八稜の隙間に紋様を刻むものの、珠紋化する。唐草紋が形骸化したものだろう。八稜の先端は丸く潰れ、外形の凹凸はゆるい。

発見当初の鏡は表面に錆が進行し、暗黄褐色の鏡胎に群青色の柔らかい錆がほぼ全面を覆う様相だった。これは鏡胎の銅成分が土中に溶け出して酸化、表面のみに青い錆がこびりついた状況である。出土した古銭の金味に目立つ現象である。しかし、紋様の不鮮明さは錆や出土状況が原因ではなく、もともとの鑄上がりの悪さ、粗略さに由来すると考える。特に、外縁端部の断面形は鋭角的な台形とならず、薄く丸みを帯びて不定形な三角形である。この鏡式中では華奢な鈕、薄い外区とあわせ、末期的様相を示す。鑄型に直接へら押しして作られたものではなく、粗略な踏み返しによって鑄上がりが悪くなったことが原因であろう。主紋様が古式であるにもかかわらず、構成が末期的様相であることとも符合する。ただし、栃木県男体山山頂遺跡発見の八稜鏡では三組六面に同範鏡が確認されたという報告もあり、同範か踏み返しによる技法研究の進展が期待される。今のところ、鑄上がりの甘さや鈕形状などから、本鏡は10世紀に遡る古式の鏡を原形に、踏み返し鑄造したものと考ええる。この鏡の鑄造時期は瑞花双鳥八稜鏡中では末期的様相を示し、11世紀以降だろう。

さて、古式の瑞花双鳥八稜鏡には鏡面に針書きで鏡像を描き、「永延二年」（988年）銘のある



第54図 出土瑞花鳳凰八稜鏡拓本（右）・復原図（左）

もの、「永延三年」（989年）針書き銘のもの、「寛弘四年」（1007年）針書き銘のものが知られる。以上よりこの鏡式の成立時期を10世紀後半～末に位置付けることができる。さらに、以上の紀年資料より古式の図像とされる飛翔するカササギを描く鏡が三重県蓮台寺跡出土鏡、栃木県男体山山頂遺跡出土鏡などにみられ、中国鏡から脱却して成立する時期は10世紀前半という説もある。

菅原道真の建議によって9世紀末（894年）に遣唐使が廃され、飛鳥・奈良時代のような中国文化の影響が途絶える。鏡に限らず、各種の器物にはわが国独特の要素が目立つかのようなのである。一見、これらは「和様」の成立と捉えられがちであるが、唐様式が衰退し、次代の五代・宋の様式への変化に連動していることを見抜く考えもある。本鏡式においても、蠟原型による重厚で肉厚な唐鏡にかわり、華奢な鈕・外縁形態の五代・宋鏡が影響したものと受けとめることができる。10世紀に本鏡式成立の一端を見ることが出来るが、この時期は本鏡式以外に鏡が作られることはなかった。系譜はほぼひとつ限りで、京都の工房と思われる。したがって、鏡の需要と生産量は少なかったと考える。

ところが、11世紀代は全国的に出土鏡数が増加し、生産量の画期を読み取ることができる。それは富裕層の増加や化粧道具の普及が原因ともされるが、実用品の需要増にとどまらない。発見鏡は末法思想に伴う経塚への埋納や、密教信仰に伴う奉納など、非実用的な用途が一般化していくことに起因する出土を示す。その意味において、本鏡は銅質や鋳上がりが悪く、実用に適さない。集落から離れ遺構に伴わないところから発見された理由をも示唆すると考える。

最後に、府内出土八稜鏡について分析する（表参照）。管見の限り、全国で知られる八稜鏡は

350面以上、近畿では50遺跡以上の発見例がある。出土遺構は墳墓・祭祀跡・経塚など様々である。特に、奈良県金峯山山頂遺跡からは118面以上の鏡が発見され、八稜鏡は少なくとも44面で確定しない。概して、東日本では住居跡や祭祀遺跡出土例が多く、西日本では墳墓や経塚出土が多い。栃木県男体山山頂遺跡には160面以上の鏡が奉納されそのうち115面が八稜鏡で圧巻である。府内でも墳墓と経塚への埋納が目立ち、包含層出土鏡の本来の性格を示唆するものである。

表2 府内出土八稜鏡

No.	出土地	出土遺跡・遺構	出最大径 (cm)	備 考
1	箕面市箕面公園北方	箕面経塚	10.8	他に鏡、白磁合子等
2	高槻市富田	富田遺跡包含層	9.5 破片	
3	枚方市牧野本町	九頭神遺跡(第53次)・土壙墓2 (SK-2)	12.1	土壙墓1から青磁碗
4	東大阪市上四条町寺山	神感寺・採集	8.6	神感寺は山岳寺院
5	大阪市	大坂魚市場跡		歪みあり
6	大阪市平野区長寺長原	長原遺跡・自然流路層	8.5 欠損	火傷あり
7	堺市翁橋2丁目	翁橋遺跡・大溝	7.4	古墳・奈良期の祭祀跡
8	高石市綾園	大園遺跡・大溝	10.2	8・9は共伴。坪境の溝か。歪みあり。
9	高石市綾園	大園遺跡・大溝	9.6	
10	和泉市池上町	池上曾根遺跡・K地区包含層	不明、破片	中世寺院か。瓦多数。
11	和泉市槇尾山施福寺	和泉槇尾山経塚・B地点	7.5	永正11年(1514) 銘経筒、他に一面。
12	柏原市玉手町	玉手山遺跡89-1区・火葬墓	10	
13	松原市天見西3・6	大和川今池遺跡北区・包含層	9.3	
14	藤井寺市小室	小室山古墳・土壙墓(栗塚東)	9.4	
15	美原町真福寺	真福寺遺跡・梵鐘鑄造遺構1号土壙	30.0	鑄型片
16	美原町丹上	丹上遺跡・包含層	9.7	掘立柱建物群
17	千早赤坂村二河原辺	誕生地遺跡・地山直上層	不明、破片	五稜鏡片

1. 西川寿勝 2003 「平安時代のタイムカプセル」『大阪春秋』111 大阪春秋社
2. 高槻市教育委員会 1978 『高槻市埋蔵文化財年報』51・52年度
3. 西田敏秀 1992 「九頭神遺跡（第53次調査）出土の八稜鏡について」
『枚方市文化財研究調査会研究紀要』第2集
4. 東大阪市教育委員会 1964 『河州神感寺跡の調査』
5. 大阪市文化財協会 1987 『大坂魚市場跡』
6. 大阪市文化財協会 2000 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV
7. 堺市教育委員会 1984 『堺市埋蔵文化財報告』18
8. 大阪市立博物館 1985 『日本の古鏡』
9. 同上
10. 第二阪和国道内遺跡調査会 1970 『池上・四ツ池遺跡』
11. 和泉市久保惣記念美術館 1983 『和泉市槇尾山経塚』
12. 柏原市教育委員会 1990 『柏原市埋蔵文化財調査概報1989年度』
13. 本書
14. 東京国立博物館 1969 『東京国立博物館館蔵品目録』
15. 大阪府文化財調査研究センター 1997 『真福寺遺跡』
16. 読売新聞社 1990 『読売新聞』河内版 3月1日朝刊
17. 文献なし 著者実見